

卒業作品のテーマ：高密度都市における「大院格」の提案

(人々の日常の行動によって重なり合って作られた都市に回帰する)

研究背景

都市は急速に近代化しているが、上党門街は「歴史保護区」としての制約により、その発展が停滞し、かつての生活の活気を失い、単なる観光地と化している。同様に、歴史保護法により制約を受けているのは、現代生活のニーズに対応できない住民だけでなく、都市内に潜在的な可能性を持つ空間も含まれている。このように、上党門街は都市開発と建築保護の間に挟まれ、異なる利用者のニーズを満たしながら有機的な再生を実現することが大きな課題となっている。

研究内容

上党門街は古くから大小の院落が集まる格子状の街区として発展してきた。この独特な街区は、古代には地域の中心地として機能し、長治市民にとって重要な歴史的記憶を担う存在である。しかし、都市人口の増加に伴い、住民たちは老朽化した建築物を基盤に仮設の小屋を建てるなどして日常生活のニーズを補わざるを得なくなった。この結果、街区全体の一体性が失われ、建物の劣化が加速。さらに、大院の多くが取り壊され、新しい建物が建設されたことで、その存在は徐々に人々の記憶から消えつつある。

設計では、街区の元来の肌理を尊重しつつ、立面や屋根の素材に注力し、歴史的背景に調和するデザインを追求した。特に、上党門街特有の合院体系と街区構造を保持し、住民の生活ニーズを満たす合理的な空間を提供するとともに、公共空間を再生し、小規模な街区環境を復元することを目指している。具体的には、元の格子状のスケールを活かし、大院の素材と構造を導入することで、歴史文化の独自性を保ちながら、現代都市に適応した持続可能な設計を実現している。このような設計を通じて、上党門街が再び都市に活力を与え、文化と生活が調和する空間へと再生することを目標としている。